

## 「やもめの献金」

2014年11月04日

マルコによる福音書 12章 41節～44節。 イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

エルサレム神殿の「婦人の庭」には、その形から「ラッパ」と言われる賽銭箱が13個、並んでいた。それぞれの「ラッパ」には神殿の諸費用ごとに目的が定められていた。時は折しも、過越しの祭りであった。多くの巡礼者たちは献金を投げ入れていた。

日本人の多くは「初詣」に行く。大きな神社の賽銭箱の下には、銀行員がいて、落ちてくる賽銭を集め、数え、銀行に運ぶという。同じようなことがあったのではないか。神殿当局にとって、稼ぎ時であった。群衆は多額の献金をする人々に見入り、感嘆していた。

そこへ、ひとりの貧しいやもめが来た。夫を失った女性は貧しい生活を強いられていた。彼女は持っていたレプトン銅貨二枚（一クアドランス）を献げた。レプトン銅貨は最小単位の銅貨で、一クアドランスは一日の生活費1デナリオンの64分の1に当たる。

主イエスは、レプトン銅貨二枚を献げたやもめに注目し、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

この主イエスの言葉に疑義を持つ。主イエスは「異邦人の庭」で、両替人やいけにえの動物を暴利で売っていた人々の台や腰掛をひっくり返す暴力事件を起こし「祈りの家を強盗の巣にした」と抗議した。また次の13章では、壮大で、荘厳さを極めたエルサレム神殿の崩壊を予告している。墮落した神殿に宗教的意義を見出していない。その神殿への献金に意味を認めただろうかと思うからである。

街頭でしばしば募金を呼びかける人たちに出くわす。もちろん、良心的な募金活動もあるが、集めたお金をカルト宗教団体が横取りしたり、自分たちで山分けしたりすることがあると聞く。献金は教会を通して確かに用いられるところにした方が良いと思っている。

主イエスは神殿に対して明らかに批判的である。それなのに、やもめの献金に対し「生活費全部を献げた」と褒めている。なぜであろうか。彼女は自分の生は神の守りの中にあるという信仰を持っていた。この一点であろう。献金すれば、今日の食べ物が買えない。しかし、彼女は神が必要を満たしてくださいと信じた。この信仰を弟子たちに注目させたのではないか。お金が無くて教会に行けない。母親は質屋に行って、質入れして献金した。これを見ていた息子は、そこまでしなければならぬのかと不審に思ったという話を聞いたことがある。献金できない時は、する必要はなく、礼拝に行くだけで十分である。

教会は献金に対し、いつ、だれに問われても説明できるように明朗会計にする。そして、教会のための支出は極力抑え、他のために献げるようにすべきである。主イエスは「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」、また「神と富とに仕えることはできない」と言われている。